
星屑狂死曲

有栖川 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑狂死曲

【Nコード】

N1645P

【作者名】

有栖川 咲

【あらすじ】

他国の利益を奪い急激な発展を遂げた犯罪大国エルヴェシウス。悪逆非道なこの国で青年は美しい銀髪の少女と出逢った。奪い奪われ、裏切り裏切られ――幾重にも罪を重ね、癒えることのない傷を抱え、それでも彼らは……。これは残酷なる大地で紡がれる《ホシクス》達の物語。

episode・1

「まあ怖い。全く物騒な話ですわ」

星屑が瞬く刻限。言葉とは裏腹に娘は微笑みを浮かべる。おんな

「私としては邪魔者が消えてくれて丁度よかったがね」

仄暗い部屋。娘の傍らで男が笑う。

「まあ男爵様まで。御貴族様の世界は恐ろしいですこと」

「おや、それは君達の世界もだろう、血薔薇姫？」

娘の腰に回される腕。その華奢な身体を抱き寄せ、艶やかな漆黒の髪を撫ぜれば、娘は美しい唇の端を一層上げ、笑みを深める。

「あら、そんなことなくってよ。ねえ男爵様、こんな物騒なお話はもう終わりにしましょう？ 今宵はわたくしが存分に楽しませて差し上げますわ」

男の首に回される両腕。娘は鮮やかな緋色の双眼を細め妖艶な笑みを浮かべた――。

星屑が瞬く刻限。街灯も疎らな路地裏。佇むふたつの影。

「依頼品だ」

ぶっきらぼうにそう言い、青年は懷から小さな包みを取り出した。中年の男は差し出されたそれを受け取り、満足げな笑みを浮かべる。

「流石だな、隻眼の坊主。ほら、報酬だ」

差し出される歪に膨らんだ袋。青年はそれを乱暴に受け取り、ジャケットのポケットに押し込んだ。

「どうも」

ただ一言吐き捨てるようにそう言つとこれ以上用はないというかのよう
に青年は男に背を向ける。男もまた青年に背を向け、路地裏の奥へと去つて行つた。数分間の出来事。とても短いやり取りだった。

+ | : + + + | +

夜の静寂に包まれた街に青年の足音が響く。鬱陶しそうに掻き上げられたダークブラウンの髪は、無造作に伸び、碌な手入れもされていないことが窺える。長い前髪の間隙から覗く黒色の眼帯は青年の右目を覆っていた。

中の物を確かめるようにジャケットのポケットに手を入れる。ジャリッと音を立てたそれは罪と引き換えに手に入れた生きるための対価。

青年は盗みを生業としていた。正確に言えば盗みの請け負いを、である。依頼された“モノ”を盗み、それと引き換えに報酬を得る。これが彼の、盗み屋の仕事だ。金品、情報、そして時には人までもが依頼の対象となる。恨む者は数知れず、しかし咎める者など誰一人としていない。近隣国では罰せられるであろうこの行いもこの国ではさして珍しいことではなかった。

「待てえええ！」

突如響き渡る怒号。静寂を切り裂く男の声。余りにも突然の出来事で不意に飛び出して来た小さな影に反応できなかった。お互いの身体がぶつかり衝撃が走る。傾く小さな身体。短い悲鳴を上げ、飛び出して来た少女は勢い良く尻餅をついた。薄汚れたローブ。病的な程白く華奢な素足。反動でずれ落ちたフードからは美しい銀髪が覗く。少女は座り込んだまま顔を上げ、感情の籠もらぬ瞳で青年を見上げた。闇を映し出したような漆黒の双眼。恐ろしい程に整ったその顔はまだ幼さを残している。少女と目が合ったその瞬間、青年は

紺碧の瞳を僅かに見開いた。

「ス——」

何か言いかけた唇。されど青年の言葉は再び響いた男の声によって遮られた。

「見つけたぞ小娘ッ！ 人形フィグの分際で手間取らせやがって！」

先程少女が飛び出してきた建物の陰からひとりの男が姿を現す。男は、咄嗟に立ち上がり逃げ出そうとした少女の腕を乱暴に掴んだ。

「ほら、大人しくしろ！ まだ自分の立場がわかってないようだな！」

少女は力一杯暴れ、必死の抵抗を見せる。しかし男女の差、まして大人と子供、力では敵うはずもなく、その身体は軽々と持ち上げられてしまった。

恐らく奴隷市場から逃げ出してきたのだろう。奴隷市場、またの名を人形市場フィグマーケット。国の至る所にあるその場所では人々は人形と呼ばれ、まるで物のように扱われていた。

逃れようと未だ暴れ続ける少女を押さえつけ、男は歩き出す。それを阻むかのように、不意に骨張った手が男の腕を掴んだ。

「何だ兄ちゃん？」

何かと思い振り返れば、紺碧の瞳と視線がぶつかる。離せと言わんばかりに男は青年を睨めつけるが、彼は一向にその手を離そうとは

しなかった。暫しの沈黙。先にそれを破ったのは青年だった。

「そいつ、俺に譲ってくれないか？」

その言葉に男は驚いた様子を見せた。青年の意図が掴めず、男は怪訝な顔で聞き返す。

「……何だつて？」

「俺に譲れ」

男を見据えたまま青年はもう一度強くそう言った。――何を考えている？ 男は顔をしかめ、青年を覗き込む。しかし、感情を映さぬその瞳から彼の考えを読み取ることはできない。

「兄ちゃん本気か？ こいつは見ての通りアングロス症候群。金貨一枚や二枚で譲れるような代物じゃあねえ。それに――」

男の言葉を遮るようにガシャンと何かが地面を叩いた。驚き下を見れば男の足下に拳大の袋が転がっていた。落ちた反動で開いた袋の口からは溢れんばかりの金貨が覗く。

ポカンと口を開け、男は足下に転がる袋の中身をまじまじと凝視した。

「……足りないか？」

「……い、いや……」

正確な枚数は定かではないが、奴隷の買い取り金としてはその金貨の量は十分過ぎる。この青年がこれほどまでの大金を持ち合わせて

いるなど夢にも思わなかったのだろう。先程までの威勢は消え失せ、男は口籠もる。

「じゃあ、そいつを置いてさっさと失せろ」

じろりと睨み付ければ、男はコインの詰まった袋をしっかりと握り締め、そそくさと立ち去っていった。残された少女は、遠ざかっていく男の背中を一瞥し、そしてその視線を目の前に佇む青年に向けた。人形のように感情を映さないその瞳にも僅かに困惑の色が見えた。

「……どういう、おつもりですか……？」

あれ程の大金を積んだにも拘わらず、青年は少女に目もくれなかった。そんな青年の様子に少女は疑念の色を覗かせる。躊躇いながらも口を開くが、青年は応じる素振りさえ見せず、まるでその言葉を打ち消すかのようにポケットから取り出した煙草に火をつけた。

「どういうおつもりですか？」

もう一度、先程よりも強くそう問うた。しかし、青年は何も答えてはくれない。

「目的は何ですか？ 何故私を買ったのですか？ 私が、アンゲロス症候群だからですか？」

矢継ぎ早に浴びせられる質問。抑揚のないその声は微かに震え、少女の不安や困惑を映し出す。

「……違いよ」

不意に口を吐いた否定の言葉。少女の問いに全く応じる様子を見せなかった青年だが、彼女の小さな唇から発せられたある言葉に彼は漸く反応を見せた。

——アンゲロス症候群。

銀色の髪に漆黒の瞳、そして病的な程白い肌を持って生まれた者をそう呼ぶ。個人差はあるが大体二十歳前には外見の成長が止まり、健康者と比べ短命の者が多いと言われている。遺伝子の突然変異によって引き起こされたと考える者が多いが、確証はなく、未だその原因は不明とされている。確認された例は極めて少なく、その美しい容姿と希少性、そして年齢を重ねても容姿が変わらないことから神聖な者として崇められる一方、闇オークションなどで高額で取引引きされることも珍しくなかった。

「俺はお前をどうこうしたい訳じゃない。何処へでも好きな所へ行けばいい。………もし行く当てがないなら……俺と一緒に来ればいい」

青年はそれだけ言うと少女に背を向け歩き始めた。——行く当てなどどこにある。私にはもう帰る場所など——。少しずつ遠くなる背中。少女は黙って青年の後を追った。

自らを追って来る足音に青年は振り返り、立ち止まる。小走りにこちらへ向かって来る少女。地面を蹴るその足は寒さで赤く染まっている。少女が追い付いたことを確認すると青年はまた歩き始めた。

「……お前、名前は？」

青年は黙々と隣を歩く少女に問うた。しかし、少女は表情ひとつ変

えず、口を閉ざしたまま。漆黒の双眼は青年を映すことなく、ただ前を見据える。暫しの沈黙の後、少女は漸く口を開いた。

「……お好きに呼んで下さって構いません」

少女はただそれだけ言うつと再び口を閉ざした。その瞳はやはり青年を捕らえることはなく、道の先を見つめたまま。

自らの名を知らぬ者、自らの名を捨てた者。名前すら与えられなかった者……。この国では決して珍しくない。

青年は自らの発言に僅かに顔をしかめた。少女が何故名を言わなかったのか将又言えなかったのか、その真相は定かではないが、彼女にとって辛辣な質問であつたことは間違いない。

「……お好きに、呼んで下さって構いません」

何も言わぬ青年に少女はもう一度そう繰り返す。前方だけに向けられていた瞳は、今は青年を映し出していた。吐き出された白い煙。宙を漂うそれは風に流され消えてゆく。青年は徐に空を仰ぎ、小さく呟いた。

「……エトワール」

エトワール
——星。

静かに紡がれたそれは少女の新たな名前となる。少女は何も言わず、ただ小さく頷いた。

他国の利益を奪い、急激な発展を遂げた犯罪大国エルヴェシウス。
国土は小さいながらも強大な勢力を誇る残酷非道なその国の西端で
青年はひとりの少女と出逢った。無数の星屑が瞬く美しい夜だった
――。

episode・2

街の外れにひっそりと佇む煉瓦造りの小さな家屋。古びたドアノブに手を掛け、青年は少女を家の中へと招き入れる。薄暗い廊下を進み、ある一室の前で青年は、後ろを歩く少女を振り返った。

「このまま真つ直ぐ進んで突き当たりを右に曲がると風呂場があるから、そこでシャワーでも浴びて来い。タオルなんかは適当に使って。俺はここにいるから」

「……はい」

青年の言葉に少女は小さく頷き、廊下の奥へと消えていく。青年は少女が浴室へ向かったことを確認すると目の前の扉を開き、部屋の中へと足を踏み入れた。

「お帰り、ルシエル」

それと同時に鈴を転がしたような声が響く。誰もいないと思っていたその場所には先客がいた。窓辺に腰掛ける赤眼の娘。ボンネットから覗く髪は闇夜の如く黒い。娘は人懐っこい笑みを浮かべ、ヒラヒラと手を振った。

「……ルーナ、お前仕事はどうしたんだよ？」

対して青年は怪訝そうに眉を顰める。いつもならこの時間はまだ仕事中的のはず。——何でここにいるんだ。青年の訝しげな視線が突き刺さる。しかし、ルーナと呼ばれた娘はそんなことなど気にも留め

ず、青年——ルシエルの問いにあっけらかんと答えた。

「飽きたから途中で帰って来ちゃった」

「お前なあ……。そんな理由で帰れるなんていいご身分だな“血薔薇姫”様」

「もおそんな顔しないでよ。冗談だってば。担当してた客が予定より早く帰ったから、いつもより早く上がったの。まあ他の客の相手してもよかつただけだよさあ、疲れたし何より面倒くさいじゃん？」

皮肉混じりの言葉もケラケラと笑い飛ばされる。ルシエルは何か諦めたようにひとつ溜め息をつき、窓辺のソファーに腰掛けた。

「…………お前が高級闇花なんて世も末だな」

——闇花^{あんか}。それは売春を生業とする者達の総称。闇花を抱え置く店が集まる地域を闇花街と呼び、ひとつの店に留まらず各地を転々とする闇花は旅闇花^{たびあんか}とも呼ばれた。ルーナはその旅闇花のひとりであり、『血薔薇姫』は彼女の源氏名である。

「ちよつとお、それどういう意味よ？」

「そのままの意味だよ」

しれっとしたルシエルの態度に、ルーナは拗ねたように薔薇色の頬を膨らませる。ルシエルはルーナから顔を背け、頬杖をつくと彼女には聞こえないくらい小さな声でボソツと呟いた。

「……………黙ってりや可愛いのに」

「えっ？ 何か言った？」

「別に、何も」

嘘だ絶対何か言ったでしょ、と執拗に問い詰められるが、口が裂けても本人を前にそんなこと言えない。適当にあしらっても負けじと食い下がるルーナに、言わなきゃよかったと自分の失言を悔いていると、そんな彼を助けるかのように不意に扉が開いた。

他に人がいるなんて知る由もないルーナは驚いたように扉を振り返る。躊躇いがちに開かれた扉から姿を現したのは白銀の少女だった。ほんのりと赤く色付いた頬。マシユマロのようなその頬には濡れた銀髪が張り付いていた。見知らぬ人間を前に部屋へ入ることを躊躇っているのか、少女は扉の近くで立ち尽くしたまま、困ったようにふた리를見つめる。

「おいで、エトワール」

ルシエルは小さく手招きをし、中へ入るよう少女を促した。ルーナの痛い程の視線に僅かに顔を引きつらせながらも少女はルシエルの傍へと歩み寄る。黙ったまま食い入るように少女を見つめていたルーナは徐に口を開いた。

「わあ、可愛い！ お人形さんみたいね！ エトワールっていうの？ この子、ルシエルの知り合い？」

キラキラした笑顔でギュッとぬいぐるみのように抱き寄せる。突然の出来事に少女は短い悲鳴を上げるも、抵抗する素振りなどは見せず、ルーナの腕の中で大人しくしていた。しかし、はつきりと顔

には出さずとも、不服そうなその瞳は確かに『離せ』と訴えかけている。

「……いや、知り合いというか………買った」

「え！？ 買った………だってルシエル………」

返って来たその答えにルーナは勢い良く振り返った。言いづらそうにそう呟いたルシエルはばつが悪そうな顔で目を逸らす。逸らされた視線を追うように、ルーナは抱き締めていた少女を放し、ルシエルの肩を掴んだ。

「ねえ、どういうこと？ ルシエル、プーペを買うような奴は嫌いって言うてたじゃない」

ぐいっとルシエルを引き寄せ、声を潜め彼に問う。緋色の瞳がじっと彼を見上げた。

「別に奴隷が欲しくて買ったんじゃないよ。そいつが――」

そこまで言うところルシエルは言葉を切った。これ以上を語る気はないのか、その先を促しても、何でもねえ、の一言で片付けられてしまう。

「目的もなしに買ったってどういうの？ そんなのおかしい………あつ！」

言葉の途中で何か閃いたのか、ルーナは不意に大きな声を上げ、自らの発言を遮った。前触れもなしに発せられたその声にルシエルの肩がビクツと跳ねる。

「ルシエル、あんなって……」

何を言い出すのかと身構えるルシエルにルーナは声を大にして叫んだ。

「ロリコンだったのね!？」

「はあ!？」

部屋中に響き渡るルーナの声。彼女の爆弾発言にルシエルは思わず固まった。否定の言葉すら忘れ、呆然と立ち尽くす彼に少女の冷やかな視線が突き刺さる。その冷たい瞳にルシエルはハッと我に返り、あらん限りの声で叫んだ。

「違うッ!！」

「何が違うのよー。十近くも年の離れた女の子連れ込むなんてロリコン以外の何者でもないじゃないっ」

ルシエルの全力の否定も虚しく、ルーナは自信に満ちた様子で断言する。突然持ち上がった疑惑。大きな誤解を解くべくルシエルはもう一度声の限りに叫んだ。

「どうしてそうなるんだふざけんなッ! 誤解を招くようなこと言うんじゃないっ!」

あれから小一時間。誤解が解けたかどうかは別として、ふたりの論争は漸く終結を迎えた。あれ程騒がしかったこの部屋も今は夜の静寂に包まれている。ソファアの上で丸まって眠る少女にそっと毛布をかけてやると、ルーナは、部屋の奥に備え付けられたキッチンに立つルシエルを振り返った。

「ねえ、次の依頼人ってマリエット子爵だよね？」

「ああ、それなんだけど……」

「なしになった、でしょ？」

ルシエルの発言を遮りルーナが口にしたそれは、彼が今まさに言おうとしたその言葉。しかし、ルシエルは一瞬彼女を振り返ったものの、さほど驚いた様子も見せず、すぐにまた背を向け作業を続けた。

「……よくご存知で」

キッチンから戻って来たルシエルの手には湯気の上がるカップがふたつ。そのひとつをルーナに渡すとルシエルは近場にある適当なソファアに腰掛ける。ソファアの背もたれに身を沈め、彼は温かな力ップに口をつけた。

「何？ またお客様からの情報ってやつ？」

ルシエルが問うと、ルーナは答える代わりに自慢気な笑みを浮かべた。しかし、そう、とただ一言返ってきた素っ気ない返事に彼女の表情は不満げなものへと変わる。

「何よその薄い反応。もしかしてもう詳しいことまで知ってるの？」

「いや、別に興味もねえし」

客から仕入れたその話を聞いて欲しかったのだろう。つまんないのとルーナは不服そうに呟いた。

「もうルシエルったらこの手の話になるといつもそうなんだから。話しても、ふうん、しか言ってくれないし。偶にはあたしの話に付き合ってくれたっていいじゃないっ」

「……ルーナ。おいルーナ」

無意味にカップをかき混ぜながら、ルーナはぶつぶつと文句を零す。わざとなのか、それとも聞こえていないつもりなのか、静かな部屋にふたりきり、小さな声といえどルシエルにも丸聞こえである。本人を前に遠慮なく言い散らすルーナはルシエルの呼び掛けになかなか気付かず、頬を膨らませたまま力チャカチャとカップをかき混ぜ続ける。十回程呼び掛けたところでルーナは漸く顔を上げた。

「ん？ 何よ？」

「ああ、予定より早いけど、ここでの仕事が全部片付いたから、できればもうこの街を出たいんだ。急遽ベルフルールで仕事が入って

……」

「ベルフルール!？」

不満に満ちていたルーナの表情がパアツと明るくなる。瞳を輝かせ聞き返す彼女の声は至極嬉しそうだった。

「ベルフルールってあのファッションで有名な街でしょ! 一度行ってみたかったの! しかも今は丁度カーニバルの時期よね! 出発は?」

「ルーナの都合が悪くなければ明日の夜にでも……」

「全然問題ないわつ。じゃあ、今夜の内に荷物まとめて置かなくちや!」

ルシエルの言葉を途中で打った切り、ルーナは意気揚々と自室へ向かう。彼女の勢いに初めは呆然とその背中を見ていたルシエルもあまりに嬉しそうな彼女の様子に思わずフツと笑みを浮かべた。

episode・3

薄暗さの残る早朝。夜行列車から降り立つ人影。

「着いたーっ！」

花の都、ベルフルール。人々がまだ寝静まるその街にルーナの明るい声が響く。彼女の後に少し遅れてルシエルとエトワールも街へ降り立った。元気なルーナとは対照的にふたりは何処となく眠^めそうな瞳をしている。

「取り敢えず宿屋探すぞ」

欠伸を噛み殺し、ルシエルはそう言った。歩き出す彼の後をルーナとエトワールが追う。

特にこだわりもない彼らは、駅の近くにある適当な宿屋に入った。扉を潜ると、人当たりの良さそうな女将に迎えられ、部屋まで案内される。小さいながらも綺麗な宿屋だった。

「それにしても運がよかったね」

勢い良くベッドに腰掛けルーナは笑った。スプリングが音を立て、彼女の身体が上下に跳ねる。カーニバルの時期ということもあり、どの宿屋も予約でいっぱいだと女将から聞いた。ここも例外ではなかったそうだが、偶々昨日の夜に一部屋だけキャンセルがあつたらしい。それが、今彼らのいるこの部屋だった。聞いているのかいないのか、ルシエルは荷物を下ろしながらルーナの話に適当な相槌

を打つ。部屋の隅に荷物を置くと彼は早々に部屋の外へと向かった。

「あれっ、ルシエル、もう出掛けるの？」

「ああ、昼前には戻るよ」

返ってきた簡潔過ぎる答え。しかし、ルーナは特に何を問う訳でもなく、気をつけて、とルシエルを見送った。

「ルシエル、出掛けるわよーっ！」

部屋に戻るや否やルーナに腕を掴まれ、半ば強制的に街へ連れ出された。目的は買い物。一度店に入ると一時間以上出て来ないなんてことも珍しくない。大きな街に来るといつもこれに付き合わされる。しかし、興味もない買い物に一時間も二時間も付き合わされるのはなかなか応えるもので、最近では適当な理由をつけて近くのカフェなどに逃げ込むこともしばしばあった。

「……まだかよ」

時計に目をやり、ルシエルは深い溜め息をつく。今日も近場のカフェに逃げ込み、そこで時間を潰していた。しかし、待つこと三時間。店員達の視線に居心地の悪さを感じ始める。待っていると言うと、いつも渋るルーナだが、今日は珍しく聞き分けがよかった。恐らくエトワールがいたお陰だろう。エトワールの手を引き、嬉しそうに店へ向かって行くルーナを見送りながら、内心助かったと思った。しかし、いつも以上に長い。きっとこれもエトワールがいるせいだろう。『エトちゃんの服も選んであげる』、そんなことをルーナが言っていた気がする。

もう何杯目かになるコーヒーを飲み干した時、漸く待ち人の姿が見えた。ルーナの両手には抱えきれない程の紙袋。満足げな笑みを浮かべ、こちらに向かって来る。

「見てっ！　こんなに買っちゃった！」

「……そう」

ルーナは、テーブルを囲むように置かれた椅子のひとつに紙袋を積み上げると、その隣の椅子に腰掛けた。ルシエルは積み上げられたそれらを眺めながら、ルーナの話の適当に聞き流す。ルシエルからすると、そんな話より、待たせてごめんの一言が欲しかった。

「可愛い服ばかりでどれにしようかすごい迷っちゃった。一番迷ったのはエトちゃんの服ねー。元がいいから何でも似合うんだもん。結局気になったやつ全部買っちゃったけど。でも、やっぱり黒が一番似合うわねー」

ニコニコと笑いながら、ルーナはエトワールの髪を撫ぜる。今のエ

トワールは、朝着ていたものとは違う、黒を基調とした可愛らしいワンピースを着ていた。真新しいそれはルーナが買い与えた洋服のひとつなのだろう。

「あ、エトちゃん、ちょっとあっち向いてくれる？」

ルーナはエトワールに背を向けさせると、ポーチから櫛を、紙袋のひとつから黒いリボンを取り出し、少女の長く伸びた銀髪を弄り始めた。

「やっぱり綺麗な髪ねー！ ……はい、完成っ」

先の方だけに緩やかなウェーブのかかったそれはルーナによって手際よくツーサイドアップに結び上げられた。美しい銀髪に黒のリボンがよく映える。

「うん、可愛いっ！ あ、そうだ。はい、これルシエルに」

ふと思い出したように、ルーナは積み上げられた大量の紙袋の中からそのひとつをルシエルに手渡した。開けてみると中には紺色のジヤケットが入っていた。

「それ、ルシエルに似合うと思って」

思いがけないプレゼントにルシエルは面食らった。花のような笑顔で相手の反応を窺うルーナに、イライラしていた自分が急に馬鹿らしくなる。

「……ありがとう」

ルシエルは照れたように視線を逸らし、小さくそう呟いた。そんな彼にルーナは今日一番の笑顔を咲かせ、嬉しそうにこう言った。

「どういたしましてっ！」

太陽が沈み、夜の帳が降りる。冷たい風が容赦なく吹き付けるこんな夜は、決まって眼帯の奥の右目が疼いた。これは罪を重ね続ける自分への罰。だけど、俺には護りたいものがある。だから俺は、彼女の反対を押し切っても常闇とこやみに潜む影になると決めた。

仕事を終え、宿屋へ戻ったルシエルは重たい足取りで階段を上る。今宵は少々しくじった。結果だけ言えば、今回の依頼も成功を収めたのだが、途中、人に見られてしまった。そのことに関してはきち

んと処理をしておいたから特に問題はないと思うが、その際に受けた傷が思いの外深く、鮮血が絶え間なく右腕を伝う。これを見たらきつとまたルーナは泣きそうな顔をするだろう。——どうか寝ていてくれ。そう願いながらルシエルは部屋のドアを開けた。

「お帰り」

薄暗い部屋。窓から差し込む月明かりに人影が浮かび上がる。それがルーナであると気が付くのに数秒とかならなかった。

「……眠れなかった？」

普段夜に仕事をすることが多い者同士、この時間帯に起きていてもそれ程おかしいことではない。しかし、口をついたのはそんな質問だった。

「ううん、ルシエルを待ってたの」

灯りを消しているのは、ベッドで眠るエトワールへの配慮だろうか。その暗がりでもルーナが右腕の怪我に気付かないでくれることを期待したが、彼女もそう鈍くはなかった。

「……嘘。眠れなかった」

ルーナは、扉の近くに立つルシエルに歩み寄り、彼の右手をそっと両の手で包んだ。悲しみ、怒り、不安。見上げる緋色の瞳は複雑な色を映し出す。

「またこんな怪我して……」

「大したことないから……」

不意にルーナが右手を振り上げた。ルシエルの言葉を打ち消すように、パシッと乾いた音が響く。同時にルシエルは左の頬に軽い痛みを感じた。

「バカッ！ あの時……もう無茶しないって……もう怪我しないって言ったじゃない……」

彼の帰りを待つ宵闇の刻^{とき}。不安で押し潰されそうな弱い自分を必死で押さえ込んだ。冷たい風が容赦なく吹き付けるこんな夜は嫌でもあの日のことを思い出す。だから私は、彼の反対を押し切っても常闇に咲く花になると決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1645p/>

星屑狂死曲

2011年10月4日18時33分発行